

どこにもない町

大村伸一

故郷を離れてどれだけの年月が過ぎたのかは忘れたが故郷のことばを忘れることはなかった。

ある日異邦の街角で聞き覚えのあるそのことばを聞いたので声のする方へ歩いていった。とぎれとぎれに聞こえることばはまぎれもなく故郷のことばに違いない。同胞に会えるのだろうか。そんなことはもう諦めて久しいのに。

声はやがて人ごみを離れ家のまばらな地区へ続く道を進んだ。声の後を追い進むにつれて思い出したのは故郷で過ごした日々まさにこの道と同じ道同じ光景の中を歩いて幾度となく我が家へと辿り着いたあの毎日のことだった。もはや声に導かれる必要もなく目の前の道を記憶の中で確かめながらそこにあるはずの我が家へと向かった。

道は記憶とすこしも違わず迷うこともなくその家に辿り着いた。門の東側の柱に刻まれた落書きは故郷の我が家にあるものと同じだ。それを刻んだとき父親に厳しく叱られたことを思い出した。あの傷は修復されたのではなかったのだろうか。

門を通過するときあやうく帰宅を告げる声をあげそうになった。勿論この家がどれだけ故郷の我が家に似ていようとあの家とは違う家でありここは異邦だった。案内を請うと奥から見知らぬ男が現れた。

男は今帰宅したばかりの様子でおそらく街中で聞いたあのことばはこの男が話していたものなのだろう。それを試すためわざと男に故郷のことばで挨拶を試してみたのだがそれに対して男は何か奇妙な表情を浮かべただけだった。そして男は言った。

「初対面の相手とはことばを交わしてはならない」

不躰な警告にしか聞こえないそのことばを告げているのに男は穏やかな表情のままそこに立ち何か答を待っているようだった。ことばを交わしてはいけない相手と会話を始めようというのだろうか。

「話をしてもいいのですか」

しかたなくそう答えると男は驚いたような表情を顔に浮かべた。何か間違ったことを答えたのかもしれないがいったい何が間違っていたのかはわからなかった。男の顔を見つめたまま

しばらく立っていると男は少し後ずさり無理やり声を絞り出したのだろう掠れた声で続きさまにこう語った。

「右足の靴底には母も歯車しか隠していない。痛いにきまっている。耳の形の微妙に平らげるまで」

男の使う単語の一つ一つは故郷のことばの語彙にもあったがしかし何ひとつ同じ意味ではないようだった。男のあやつることばの抑揚もまた故郷で使われる抑揚とまったく違いはなかったが同じ抑揚で語られても何ひとつ意味は通じなかった。

誰かのいたずらではないのかとあたりを見回してみたがいたずらの成果を確かめようと誰かが偵察しているような気配はなかった。男のことばがわざと意味を持たないように仕組まれたのでないならばこの家は見かけとは裏腹にその内包において故郷とは相入れない存在であるらしい。

男に通じるはずもない別れの挨拶は省略して家を離れた。その後も男はずっとその場所に立ってこちらを見つめ続けていた。相変わらず記憶の中でと同じ佇まいの景色の中の道を足早に辿りやがて再び異邦の町の雑踏に帰り着いた。

まったく知らないことばと場所の中で落ち着いて思い返すとあの記憶の中から作りあげられたような場所であの男だけが記憶になかったことに気づいた。それは似たところなどまったくありはせず見かけは同じことばを使いながら会話をすることもできなかったあの男こそが私自身だったということなのだろうか。

馬鹿げたその考えは次の角を曲がる前にすべて忘れてしまった。